

敦煌禪宗文獻分類目録

田中良昭
程 正

緒言

今回発表する「敦煌禪宗文獻分類目録」の「I 燈史類」は、今回の共同研究者の一人である田中良昭が、かつて発表した「敦煌禪宗資料分類目録初稿」の「I 傳燈・嗣承論」を基本とし、その後の研究成果を網羅して作成した最新の目録である。

かつて発表した「敦煌禪宗資料分類目録初稿」（以下、「初稿」）は4回のシリーズからなるものであり、それを具体的に示せば下記の通りである。

1. 「I 傳燈・嗣承論」（『駒澤大學佛教學部研究紀要』27, 1969, pp.1-17）
2. 「II 禪法・修道論〔1〕」（同29, 1971, pp.1-18）
3. 「II 禪法・修道論〔2〕」（同32, 1974, pp.30-49）
4. 「II 禪法・修道論〔3〕」（同34, 1976, pp.1-24）

ところで、1976年のシリーズ最終回の公刊から、すでに32年が経過し、この間、この分野の専門家による精力的な努力の積み重ねによって、敦煌禪宗文獻の研究に飛躍的な進展がもたらされたのである。それ故に、当時においては、この「初稿」は最新の研究成果を集約したものではあったが、今回はそれらに大幅な内容の追加や補正などが必要となったのである。

こうした状況の中で、今回は、田中良昭と程正の共同研究によって、より完全な「敦煌禪宗文獻分類目録」（以下、「目録」）の作成を試みることにした。この「目録」の作成にあたり、かつて「初稿」においては6項目に分類した敦煌禪宗文獻の内容を、その後の研究状況を踏まえ、下記の如く新たに4項目の分類に改めることにした。

	「初稿」(舊)	「目録」(新)
I	傳燈・承嗣論	I 燈史類
II	禪法・修道論	II 語録類
III	銘・箴・讚・偈類	III 注抄・偽經論類
IV	教理問答・綱要書類	IV 偈頌類

V 經注・經序類

VI 偽作經論類

したがって、今回の「目録」はそのうちの「I 燈史類」について作成したものであり、残りの項目については、今後順次作成していく予定である。

目録凡例

1. 本稿では、敦煌禪宗文獻を次の4項目に分類した。ただし、文獻によってはかならずしもこの4項目に収めきれないもの、或いは2項目以上にわたるものもあり、その裁量は筆者の判断によった。

- [項目] I 燈史類
 II 語録類
 III 注抄・偽作經論類
 IV 偈頌類

2. 敦煌文獻の表記については、スタイン、ペリオ、北京、オルデンブルクの四大コレクションでは以下の略號を用いた。

- [略号] S=ロンドン、大英圖書館所藏、スタイン蒐集の漢文文獻
 P=パリ、フランス國立圖書館所藏、ペリオ蒐集の漢文文獻
 字=北京、中國國家圖書館所藏、漢文文獻
 BD=北京、中國國家圖書館所藏、漢文文獻、但し『敦煌劫餘録』
 以後の編目部分
 Φ=サンクトペテルブルク、東方學研究所サンクトペテルブルク
 分所所藏、オルデンブルク蒐集の漢文文獻中、フルグによる
 編目部分
 Д x =サンクトペテルブルク、東方學研究所サンクトペテルブルク
 分所所藏、主にオルデンブルク蒐集の漢文文獻中、メン
 シコフ等による編目部分

その他の敦煌文獻についても適宜略號を用いた。

3. 文獻目録である以上、各おのの文獻についての外見的状态、たとえば、縦幅と横幅、紙質、首尾の完缺、書寫年代、紙數・行數、表 (Recto) 裏 (Verso)、接續状態、筆蹟等について記述すべきであるが、すべての原寫本

を實見していないこともあり、煩を避けるために省略した。

従って、今回はまず該當する文獻番號を列記した上で、その文獻に基づくテキストの翻刻・校定の現状及びその文獻に関する研究成果としての著書・論文をその成立順に挙げ、さらに〔略記〕として、當該文獻の著者、成立年代、特色、他との相互關係等についての解説を加えた。

4. 出現頻度の高い著書については、下記のような略稱を用いた。ただし次回以降は必要に應じて追加していく。

〔略稱〕

〈雜誌類〉

- ・『印度學佛教學研究』 → 『印佛研』
- ・『日本佛教學會年報』 → 『日佛年報』
- ・『佛教史學研究』 → 『佛教史學』
- ・『駒澤大學佛教學部研究紀要』 → 『駒大佛教紀要』
- ・『駒澤大學佛教學部論集』 → 『駒大佛教論集』
- ・『駒澤大學禪研究所年報』 → 『駒大禪研年報』
- ・『駒澤大學宗教學論集』 → 『駒大宗教論集』
- ・『駒澤大學大學院佛教學研究會年報』 → 『駒大大學院年報』
- ・『駒澤短期大學研究紀要』 → 『駒澤短大紀要』
- ・『駒澤短期大學佛教論集』 → 『駒澤短大佛教論集』
- ・『愛知學院大學禪研究所紀要』 → 『禪研究所紀要』
- ・『花園大學文學部研究紀要』 → 『花大紀要』
- ・『花園大學禪文化研究所紀要』 → 『禪文研紀要』
- ・『東京大學東洋文化研究所紀要』 → 『東文研紀要』
- ・『松ヶ岡文庫研究年報』 → 『松ヶ岡年報』
- ・『曹洞宗宗學研究紀要』 → 『宗研紀要』
- ・『曹洞宗研究員（研究生）研究紀要』 → 『曹洞宗研究紀要』

〈單著類〉

- ・矢吹慶輝『鳴沙餘韻』（岩波書店, 1930）
→ 矢吹慶輝『鳴沙餘韻』圖版篇（臨川書店, 1980）→ 『鳴沙餘韻圖版』
- ・矢吹慶輝『鳴沙餘韻解説』（岩波書店, 1933）

- 矢吹慶輝『鳴沙餘韻』解説篇 (臨川書店, 1980) → 『鳴沙餘韻解説』
- ・ 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』 (法藏館, 1967) → 『柳田史書』
 - ・ 田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究』 (大東出版社, 1983) → 『田中敦煌』
 - ・ 柳田聖山『禪佛教の研究』〈柳田聖山集 第1巻〉 (法藏館, 1999)
 - 〈柳田〉 1
 - ・ 柳田聖山『禪文獻の研究 上』〈柳田聖山集 第2巻〉 (法藏館, 2001)
 - 〈柳田〉 2
 - ・ 柳田聖山『禪文獻の研究 下』〈柳田聖山集 第3巻〉 (法藏館, 2006)
 - 〈柳田〉 3
 - ・ 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』〈柳田聖山集 第6巻〉 (法藏館, 1999)
 - 〈柳田〉 6

〈編著類〉

- ・ 田中良昭他編『敦煌Ⅱ』〈大乘佛典 中國・日本編11〉 (中央公論社, 1989)
 - 『敦煌Ⅱ』
- ・ 方廣錫編『英國圖書館藏敦煌遺書目錄 斯6981號～斯8400號』 (北京, 宗教文化出版社, 2000)
 - 『方・英藏目錄』
- ・ 郝春文編『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』 1 〈敦煌社會歷史文獻釋録第1編〉 (北京, 科學出版社, 2001)
 - 『郝・英藏釋録』 1
- ・ 郝春文編『英藏敦煌社會歷史文獻釋録』 2～5 (以下續刊)
 - 〈敦煌社會歷史文獻釋録第1編〉 (社會科學文獻出版社, 2003～2006)
 - 『郝・英藏釋録』 2～5
- ・ 方廣錫編『藏外佛教文獻』 1～9 (北京, 宗教文化出版社, 1995～2003)
 - 『方・藏外』 1～9
- ・ 方廣錫編『藏外佛教文獻』 10～12 (北京, 中國人民大學出版社, 2008)
 - 『方・藏外』 10～12

〈敦煌寫本シリーズ (寫真版)〉

- ・ 『敦煌寶藏』 1～140 (臺北, 新文豐出版公司, 1981～1986)
 - 『寶藏』 1～140
- ・ 『英藏敦煌文獻 (漢文佛經以外部分)』 1～14 (四川, 四川人民出版社, 1990～1995)
 - 『英藏敦煌』 1～14

- ・『法國國家圖書館藏敦煌西域文獻』 1～34 〈敦煌吐魯番文獻集成〉
（上海，上海古籍出版社，1994～2005） → 『法藏敦煌』 1～34
- ・『中國國家圖書館藏敦煌遺書』 1～7
（南京，江蘇古籍出版社，1999～2001） → 『中國北京敦煌』 1～7
- ・『國家圖書館藏敦煌遺書』 1～90（以下續刊）
（北京，北京圖書館出版社，2005～） → 『北京敦煌』 1～90
- ・『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻』 1～17
〈敦煌吐魯番文獻集成〉（上海，上海古籍出版社，1992～2001）
→ 『俄藏敦煌』 1～17
- ・『國立中央圖書館藏敦煌卷子』 1～6（臺北，石門圖書公司，1976）
→ 『臺灣敦煌』 1～6
- ・『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』 1～2 〈敦煌吐魯番文獻集成〉
（上海，上海古籍出版社，1993） → 『上博敦煌』 1～2
- ・『北京大學圖書館藏敦煌文獻』 1～2 〈敦煌吐魯番文獻集成〉
（上海，上海古籍出版社，1995） → 『北大敦煌』 1～2
- ・『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』 1～7 〈敦煌吐魯番文獻集成〉
（上海，上海古籍出版社，1996～1998） → 『津藝敦煌』 1～7
- ・『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』 1～4 〈敦煌吐魯番文獻集成〉
（上海，上海古籍出版社，1999） → 『上圖敦煌』 1～4
- ・『甘肅藏敦煌文獻』 1～6（蘭州，甘肅人民出版社，1999）
→ 『甘肅敦煌』 1～6
- ・『臺東區立書道博物館所藏中村不折舊藏禹域墨書集成』（上中下）（2005）
→ 『不折舊藏』（上中下）

上記の著書・論文等については漏脱も予想されるので、その補充は今後に期したい。

5. 各項目内での文獻の配列順序は、本來ならば、成立年代順にすべきであるが、成立年代の不明なものが多いため、すべてアイウエオ順とした。また各コレクションの配列順序は、スタイン、ペリオ、北京、オルデンブルク、臺灣の順序とし、その後に世界各地に散藏されているものを加えた。なお、同一コレクション内では文獻番號の順とした。

また、著書・論文の配列は、刊行・發表年の順に記した。

I 燈史類

1. 聖胄集

- ①S2144V ②S4478 ③鹹29V ④甘博015

[テキストの翻刻・校定]

③許國霖『敦煌石室寫經題記與敦煌雜録』下輯 (上海, 商務印書館, 1937, 139右-144左)

②柳田聖山「玄門『聖胄集』について—スタイン蒐集燉煌寫本第4478號の紹介—」(『佛教史學』7-3, 1958, pp.54-57) → 〈柳田〉1 (pp.653-657)

[著書・論文]

柳田聖山「玄門『聖胄集』について—スタイン蒐集燉煌寫本第4478號の紹介—」(『佛教史學』7-3, 1958, pp.44-57) → 〈柳田〉1 (pp.637-659)

→柳田論文 (1)

柳田聖山『寶林傳』の影響と『聖胄集』(『柳田史書』pp.394-404)

→ 〈柳田〉6 (pp.394-404) →柳田論文 (2)

田中良昭『『聖胄集』考』(『印佛研』24-1, 1975, pp.103-108)

→ (『田中敦煌』pp.121-134) →田中論文 (1)

田中良昭『『聖胄集』の歴史的な性格—壇法儀則本『聖胄集』と寶林傳本『聖胄集』—』(『駒大佛教紀要』60, 2002, pp.31-52) →田中論文 (2)

[略記]

『聖胄集』は、宋の惟白の『大藏經綱目指要録』(1103) 卷8 (『昭和法寶總目録』卷2所收) 卷末の記載によって、光化(898-901)中、華嶽玄偉禪師が、貞元(785-805)已來の出世宗師の機縁を集め、祖偈を將って其の基緒と作し、編纂したことは知られていたが、その存在が知られていなかったもので、最初にその一斷簡である②が入矢義高氏によって發見され、それを柳田聖山氏が柳田論文(1)において發表されたものである。

本書の成立は、本文中の「至今大唐光化二年己未得九百八十年矣」によって光化2年己未(899)であること、またその卷數は、『唐書』藝文志及び日本の義諦の『禪籍志』卷上によって5卷であったこと、更に、『寶林傳』が金版大藏經への入藏に際して、卷2卷10の2卷が缺本であったため、『聖

胄集』の該當部分で卷2は補いえたが、尚卷10を缺いていたこと等が知られている。

また③は、同じく柳田氏が、入矢氏の御教示によるとして、柳田論文(1)の「付記」に關説されたもので、許國霖氏が『敦煌石室寫經題記與敦煌雜錄』下輯に「唐末禪宗雜記付法事」と擬題して収録されたものである。この書は、かつて田中良昭氏が柳田氏から直筆のノートの貸與を受けて筆記したという貴重なもので、柳田論文(1)の付記によれば、『聖胄集』の別本とされていた。しかし、田中論文(1)によれば、この③は四つの部分に分けられ、第1が首部を缺く付法傳、第2が『聖胄集』卷1の斷片、第3が『佛初興世時記』『付囑法藏傳略鈔』『法住記略抄』の3種、第4が『分燈之陸經 從上西天八(廿八?)祖受記、唐來六代祖師密傳心印』と題する傳法偈であるという。この第4の傳法偈は途中で斷缺しているが、それに接續するのが①である。すなわち①はこの傳法偈に續いて、密教の修行の功德と傳持、さらに2種の發願文等96行にわたる密教文獻をともっており、③の首部にある禪宗付法傳を密教的に改變することと關連する。

ところで、後に田中氏は、P3913に『壇法儀則』と略稱される密教文獻を發見し、③はその最終品にあたる「付法藏品部第三十五」の異本の一部であって、その中で『聖胄集』卷1部分のみを引用し、その一部を密教的に改變したものであることを指摘しており、③を禪宗文獻の『聖胄集』の別本とするよりは、むしろ密教文獻の『壇法儀則』の別本とすべきであることを明らかにした。さらに田中論文(2)によれば、現存する『聖胄集』のテキストを総合しても、5卷あるべき本来の分量の半分にも満たないもので、複数のテキストがあったにもかかわらず、本来の『聖胄集』としてのものは皆無であったことを結論づけている。

なお、『柳田史書』の卷末にある「敦煌・禪宗關係資料一覽」では、S276とS366の2種を『聖胄集』としているが、これらはいずれも『付法藏傳略抄』に入れるべきものである。

特に『聖胄集』(899)は、禪宗燈史として重要な『寶林傳』(801)と『祖堂集』(952)に介在するものとして、その出現は禪宗傳燈説の展開を知る上で貴重な役割を果すものである。

2. 祖師傳教 西天廿八祖唐來六祖 (法寶東流因縁 (擬))

①P2977

〔テキストの翻刻・校定〕

田中良昭『祖師傳教 西天廿八祖唐來六祖』(『田中敦煌』 pp.108-110)

齋藤智寛「悟れなかった人々—禪律雙修者の祈りと救い—」(『東方學報』 82, 2008, p.90)

〔著書・論文〕

田中良昭「敦煌出土『祖師傳教西天廿八祖唐來六祖』について」(『印佛研』 11-1, 1963, pp.251-254) → 『田中敦煌』 (pp.107-119)

齋藤智寛「悟れなかった人々—禪律雙修者の祈りと救い—」(『東方學報』 82, 2008, pp.69-117)

〔略記〕

本書は、『法寶東流因縁』(擬)と呼ばれるテキストを構成する5つの部分のうち、第4に相当するもので、禪宗の西天28祖説を主張する『寶林傳』(801)のそれとよく似た内容を有するものである。

本書のテキストについては、敦煌文獻にしか存せず、しかもわずかに①の1種のみである。すなわち、①は敦煌禪宗文獻として、田中良昭氏の「敦煌出土『祖師傳教西天廿八祖唐來六祖』について」と題する論文によって始めて紹介されたものである。それによれば、①は首部を缺き、全體で8紙96行からなるものである。このうち、「第四 明祖師傳教 西天廿八祖唐來六祖」と題される本書は、第3紙11行目から第7紙4行目までの43行にわたっているという。さらに、齋藤智寛氏の「悟れなかった人々」と題する論文においては、従来「康僧會傳」などと呼ばれてきたP4964の巻尾と、①の冒頭が接續する文書であったことを指摘した上で、『法寶東流因縁』(擬)と呼ばれた①の内容が、次の5種のものによって構成されていることを明らかにされた。すなわち、「第一 (標題不明)」、「第二 明僧會遊吳」、「第三 明塔」、「第四 明祖師傳教」、「第五 五臺山志 (擬)」の5種である。

ところで、田中氏は前掲論文において、本書は『寶林傳』系の祖統説として新たに出現した西天28祖説を受け継いだものであるとしながらも、『寶林

傳』による洪州宗系とは別系統の人によって主張された傳燈系譜ではなからうか、と推測された。これを踏まえながら、齋藤氏は前掲論文においては、『法寶東流因縁』(擬)は『寶林傳』と源流を同じくしつつ別々に發展し、『聖胄集』以前にはほぼ形を整えて敦煌に伝えられ、同光2年(924)に現地の僧侶によって最終的な補訂が加えられたものと推定し、本書の著者を非エリート(禪律雙修者)であると位置づけている。

3. 壇法儀則 (唐末禪宗雜記付法事 (擬))

- ①S2144V ②S2316V ③S5981 ④S8758 ⑤S9407 ⑥S11968
 ⑦P2791 ⑧P3212 ⑨P3913 ⑩冬74 ⑪餘01 ⑫成31V
 ⑬鹹29V ⑭BD15147 ⑮甘博015

[テキストの翻刻・校定]

⑬許國霖『敦煌石室寫經題記與敦煌雜錄』下輯(上海, 商務印書館, 1937, 139右-144左)

①③⑦⑧⑨⑬田中良昭「偽作の密教文獻に現われた禪宗祖統説—敦煌出土ペリオ本三九—三號の紹介(一)(二)一」(『宗教學論集』8, 1974, pp.93-115, 同8, 1977, pp.297-315) → 田中論文(1)

①③⑦⑧⑨⑬田中良昭『壇法儀則』の「付法藏品部第三十五」(『田中敦煌』pp.135-166)

①②⑨⑪⑫⑬⑭⑮侯沖「金剛峻經金剛頂一切如來深妙祕密金剛界大三昧耶修行四十二種壇法經作用威儀法則 大毘盧遮那佛金剛心地法門密法戒壇法儀則」(『方・藏外』11, pp.22-144)

[著書・論文]

田中良昭「唐末の傳燈資料に顯われた禪と密教との交渉」(『宗學研究』5, 1963, pp.70-74) → 『田中敦煌』(pp.579-580, 586-591) → 田中論文(2)

平井宥慶「敦煌出土偽疑經文獻よりみた密教と禪」(『加藤章一先生古稀記念論文集 佛教と儀禮』國書刊行會, 1977, pp.139-162)

田中良昭「禪宗傳燈説の發展」(『宗學研究』20, 1978, pp.65-72) → 『田中敦煌』(pp.593-604) → 田中論文(3)

平井宥慶「敦煌本・密教疑經典考」(『密教文化』150, 1985, pp.53-73)

呂建福「唐代密宗的形成和發展」(『中國密教史』北京, 中國社會科學出版社, 1995, pp.201-431)

田中公明「『金剛峻經』とチベット密教」(『敦煌 密教と美術』法藏館, 2000, pp.195-216)

田中良昭「『聖胄集』の歴史的な性格—壇法儀則本『聖胄集』と寶林傳本『聖胄集』—」(『駒大佛教紀要』60, 2002, pp.31-52) →田中論文(4)

李小榮「敦煌密教文獻概述」(『敦煌密教文獻論稿』北京, 人民文學出版社, 2003, pp.1-44)

郭麗英「敦煌漢傳密教經典研究: 以『金剛峻經』爲例」(『敦煌吐魯番研究』7, 中華書局, 2004, pp.227-237)

侯冲「敦煌遺書中現存的『壇法儀則』」(明生主編『禪和之聲—“禪宗優秀文化與建構和諧社會”學術研討會論文集』北京, 宗教文化出版社, 2007)

齋藤智寛「『梵網經』と密教—S2272V「金剛界心印儀」の繡刻紹介にちなんで」(『敦煌寫本研究年報』2, 2008, pp.23-46)

[略記]

『壇法儀則』は、『金剛峻經金剛頂一切如來深妙祕密金剛界大三昧耶修行四十二種壇法經作用威儀法則 大毘盧遮那佛金剛心地法門祕法戒壇法儀則』という長い題名を持ち、巻末の「付法藏品部第三十五」において、すでに存在した數種の禪宗傳燈説を取り込んで、それに密教的な改變を加えた長文の密教文獻の略稱である。

本書のテキストについては、最初に紹介されたのが⑬である。すなわち、かつて柳田聖山氏が「玄門『聖胄集』について」と題する論考を公にされた際に、その巻末に「付記」として、入矢義高氏の御教示によるその存在に言及したものであり、許國霖氏が『敦煌石室寫經題記與敦煌雜錄』下輯に「唐末禪宗雜記付法事」と擬題して収録したものである。當初、柳田氏は⑬を『壇法儀則』のテキストではなく、『聖胄集』の別本であるとされた。ところが、その後パリでペリオコレクションを調査した田中良昭氏が、本書の完本であるテキスト⑨を發見したことによって、⑬は本書の最終品にあたる「付法藏品部第三十五」の一部であって、その中で『聖胄集』巻1部分のみを引用し、その一部を密教的に改變したものであることが判明した。また①は田中氏によって⑬に連續するものであることが明らかにされている。

そして、②③④⑤⑥⑦は、いずれも田中氏が発見したもので、「付法藏品部第三十五」の殘簡である。すなわち、②は田中論文(3)によって初めて紹介されたもので、本書の全卷三五部のうちの部第二六に当たるものであるという。③は田中論文(1)などで紹介されたもので、「大唐同光二年智巖往西天巡禮聖跡後記」と題する本文の後に「付法藏品部第三十五」の一部が連寫されている寫眞一葉のものである。④は上半部のみの寫眞一葉のもので、『田中敦煌』に収録される本書の校訂本のp.152下段1行目の「誕滅・…」から、p.153下段6行目の「富那」までの内容に相當する殘簡である。⑤は上半部のみの寫眞一葉のもので、校訂本のp.157下段2行目の「行化・…」から、p.159下段1行目の「是姑□」までの内容に相當する殘簡であり、④と同筆ではあるものの、両者は直接には接續しない。⑥は上半部のみの寫眞一葉のもので、校訂本のp.152下段4行目の「年丙・…」から、p.159下段1行目から2行目の「母佛」までの内容に相當する殘簡である。⑦は田中論文(1)で紹介されたものであり、後述する「付法藏品部第三十五」の第三部分の内容、すなわち、『佛初興世時(記)』、『付囑法藏傳略抄』、『法住記』の3種に相當するもので、校訂本の該當部分、すなわち、p.151下段4行目の冒頭から、p.160下段5行目までの内容の底本とされるほどよいものである。

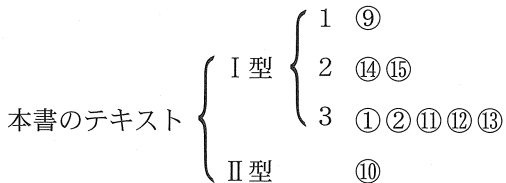
また、⑩は平井宥慶氏の「敦煌出土偽疑經文獻よりみた密教と禪」によって初めて紹介されたもので、本書の部第一から部第八の中途までの内容を有しているという。

さらに、1999年刊行の『甘肅敦煌』4に収録された⑮は、卷末に付された徐祖蕃氏の解題によってその存在が知られるようになったものである。徐氏の解題によれば、⑮は本書の見出しの「部第廿八」から「部第三十五」までの内容を有しており、尾題に「卷四」としていて、内容的には⑦と同一系統に屬しているという。

なお、⑭については、筆者は未見であるが、侯冲氏の「敦煌遺書中現存的『壇法儀則』」と題する論文によれば、わずかに『敦煌劫餘錄續編』（北京圖書館善本組編、1981, p.114）に1347號として編目されているのみである。

上記の各種テキストのうち、⑨と⑩はその冒頭部分にあたる「部第一」においてそれぞれ異なる内容を有していることが、平井宥慶氏の「敦煌出土偽疑經文獻よりみた密教と禪」と同氏の「敦煌本・密教疑經典考」によって指摘されている。すなわち、⑨では四十八戒の受持を勧めるのに對し、⑩では

佛、菩薩や印相、呪文を説明しているという。さらに、齋藤智寛氏の『梵網經』と密教——S2272V「金剛界心印儀」の翻刻紹介にちなんで」と題する論文では、標題や内容などの共通性から見て、①②⑨⑪⑬⑮を同一系統に属するものと推測されている。一方、侯冲氏は前掲論文において、これらのテキストを大きくⅠ型とⅡ型に分け、Ⅱ型には⑩しかないのに對し、Ⅰ型にあるものはさらに3種の系統に細分することができることを指摘されている。これらを圖示すれば、下記の通りとなる。



ところで、本書は元來密教文獻ではあるが、禪宗燈史の色彩が濃厚に見られるのは、その巻末にある、従來「付法藏品部第三十五」といわれる部分の内容である。田中氏は本書の完本である⑦を發見し、該當する部分を分析した結果、田中論文(2)(4)において「付法藏品部第三十五」の内容が次の6種によって構成されていることを指摘している。すなわち、

(1) 大毘盧遮那佛より河沙諸佛を経て過去七佛から始まり、釋迦牟尼佛以降は、摩訶大迦葉より舍那婆斯系の傳燈系譜を連ね、第17代に他に例をみない化身羅漢を入れたために、本来第24代の舍那婆斯が第25代に繰り下り、以下無着、天親の兩菩薩を経て、第28代菩提達摩に至り、更に第33代慧能禪師から後代修行菩薩への密傳心印までを説く本書獨特の傳燈説。

(2) 『聖胄集』の巻1部分のみを引用し、その一部を密教的に改變したもの。

(3) 『佛初興世時(記)』、『付囑法藏傳略抄』、『法住記』の3種。

(4) 『分燈之陸經 從上西天〔廿〕八祖受記唐來六代祖師密傳心印』と題する『寶林傳』系の西天28祖唐土6祖の傳法偈集。

(5) 「我身則是諸佛」、すなわち密教の即身成佛を實現するための儀軌。

(6) 金剛藏菩薩の3字(唵、吽、押)の觀法。

である。そして田中論文(3)では、密教文獻である本書は、密教の東土への流傳を主張するために、既に多くの傳燈説を確立していた禪宗のそれを巧

みに依用し、一部に密教的改變の手を加えたのが本書の卷末に位置するこの「付法藏品部第三十五」であると結論づけた。

なお、本書の成立年代については、齋藤氏の前掲論文によって、光化2年(899)から10世紀末までの成立と推定されている。

4. 傳法寶紀

- ①S10484 ②P2634 ③P3559 ④P3858

[テキストの翻刻・校定]

②『大正藏』卷85, 古逸部 (1932, pp.1291a-c)

②宇井伯壽『禪宗史研究』(岩波書店, 1935, pp.436-438) →再版(同, 1966)

③神田喜一郎「傳法寶紀の完帙に就いて」(『積翠先生華甲壽記念論纂』寫眞1圖-7圖, 同記念會, 1942)

②③白石虎月『續禪宗編年史』(酒井本店, 1943, pp.972-977) →(東方界, 1976)

②③『燉煌出土傳法寶紀』(駒澤大學圖書館謄寫印刷部, 1956, 但しこれは白石虎月『續禪宗編年史』附録(三)よりの轉寫)

②③柳田聖山『柳田史書』圖版12-15, 資料六 (pp.559-593) →〈柳田〉6

②③④柳田聖山『初期の禪史I』〈禪の語録〉2 (筑摩書房, 1971, pp.327-435)

①榮新江「敦煌本禪宗燈史殘卷拾遺」(『周紹良先生欣開九帙慶壽文集』北京, 中華書局, 1997, pp.231-232)

[著書・論文]

穴山孝道「傳法寶紀に就いて」(矢吹慶輝『鳴沙餘韻解説』第2部「敦煌出土支那古禪史並に古禪籍關係文獻に就いて」に抄録, 岩波書店, 1933, pp.526-529) →(臨川書店, 1980)

宇井伯壽「北宗殘簡二、傳法寶紀並序」(『禪宗史研究』岩波書店, 1935, pp.422-423) →(同, 1966)

神田喜一郎「傳法寶紀の完帙に就いて」(『積翠先生華甲壽記念論纂』同記念會, 1942, pp.145-152)

柳田聖山「傳法寶紀とその作者—ペリオ3559号文書をめぐる北宗禪研究資料の札記, その一一」(『禪學研究』53, 1963, pp.45-71) → 〈柳田〉1 (pp.188-223)

柳田聖山「『傳法寶紀』の成立」(『柳田史書』pp.47-58) → 〈柳田〉6

柳田聖山「禪思想の形成—『傳法寶記』と『楞伽師資記』—」(『花大研究紀要』1, 1970, pp.257-308)

渡部正英「『傳法寶紀』と『歴代法寶記』について」(『宗學研究』22, 1980, pp.212-216)

榮新江「敦煌本禪宗燈史殘卷拾遺」(『周紹良先生欣開九帙慶壽文集』北京, 中華書局, 1997, pp.231-244)

楊曾文「杜朮和『傳法寶紀』」(『唐五代禪宗史』北京, 中國社會科學出版社, 1999, pp.140-144)

齋藤智寛「『傳法寶紀』の精神」(『集刊東洋學』85, 2001, pp.78-97)

王書慶, 楊富學「『傳法寶紀』的作者及其禪學思想」(『敦煌研究』99, 2006, pp.99-102)

〔略記〕

『傳法寶紀』は、弘忍→法如→杜朮と次第する北宗系の杜朮が編纂した最初期の禪宗燈史で、達摩、慧可、僧璨、道信、弘忍、法如、神秀など七人の祖師の傳記を述べたものである。弘忍と神秀の間に、杜朮自ら師事した嵩山法如を立てることが、禪宗燈史としての本書の最も目立つ特色といえよう。

本書は、當初②のみが知られ、『大正藏』卷85はこれによっていた。これは首部完全であるが、達摩章の最初の數行で斷缺しているために、完本の出現が待たれていた。昭和11年(1936)、神田喜一郎氏がパリのフランス國立圖書館で、新たに完本の③を發見し、これによってはじめてその全貌が知られるに至った。③の全文は、昭和17年(1942)、神田喜一郎氏により『積翠先生華甲壽記念論纂』に寫眞版で掲載され、更に昭和18年(1943)、白石虎月氏がそれを校訂し、『續禪宗編年史』の第三附録として公にされた。この③は、神田氏が紹介されたように、『傳法寶紀』のみならず、馬鳴造とされる『圓明論』、弘忍の『修心要論』、僧稠に歸せられる『大乘心行論』その他數種のものを連寫した貴重な資料で、昭和35年(1960)、柳田氏はパリに滞

在中の柴田増實氏の手を経て③全體の寫眞を入手され、それに基づいて「傳法寶紀とその作者」と題する詳細な研究成果を發表された。更に同氏は『初期禪宗史書の研究』の附録「資料の校注」に、資料六として②③の嚴密な校定と詳細な注記を掲げられ、解題を付される。その解題によれば、③の紙背文書は差科簿といわれ、唐代社會經濟史の重要資料として、古くは玉井是博、那波利貞兩氏によって研究され、更に龍谷大學西域文化研究會編の『敦煌吐魯番社會經濟資料』巻下に、西村元佑氏が「唐代敦煌差科簿の研究」と題して關説されており、このテキストが表裏を別々の分野で貴重とされた珍しい文書である。この經濟文書は天寶12年（753）の記録といわれ、それが紙背の禪宗文獻の書寫年代の最下限を800年頃と推定する一つの目安を提供している。また池田温氏の教示によれば、紙背の上から、③の直前に接續するものがP3664であり、同じ天寶10載（751）前後の燉煌県差科簿（徭役のための丁男の帳簿）としてP2657、P2803、P3018があるという。それらの紙背をみると、P2657は『觀心論』、P2803は『深密解脫要略』、P3018は『菩提達摩論』（四行論長卷子雜録）というように、すべてが佛教文獻であり、特に禪宗と密接な關係にあったことが窺われ、池田氏も紙背關係からの文獻研究の必要性を提唱されている。

また、①については、近年、榮新江氏の「敦煌本禪宗燈史殘卷拾遺」によってその存在が知られたもので、僧可傳の一部と見られるわずか3行の斷卷である。

『傳法寶紀』の作者については、柳田氏がその考證をされており、北宗の義福（658-736）がかつて東都大福先寺で師事した拙法師とされる。京兆杜拙といっているのは拙法師が後に還俗して俗姓の杜氏を名乗ったという神田氏の説を採用され、その成立を開元初年（713）をさほど降らぬ頃、京兆での編集とされている。

これに對し、中國の研究者である楊曾文氏は、その著『唐・五代禪宗史』の「杜拙和『傳法寶紀』」と題する項目において、本書にある「睿宗」という呼稱に注目し、それは唐の睿宗皇帝李旦が716年に死去してからおくられた廟號であると指摘され、さらに、『菩提達摩南宗定是非論』にある神會の「普寂禪師爲秀和上豎碑銘、立秀和上爲第六代。今修法寶紀、又立如禪師爲第六代。……」という言葉を根據にして、本書の成立を716年から730年までの間としている。

5. 付囑法藏傳略抄

- ①S264V ②S276V ③S366V ④S1053 ⑤S5981 ⑥P2680 ⑦P2774
⑧P2775 ⑨P2776 ⑩P3355 ⑪P3570 ⑫P3727 ⑬P4968

〔テキストの翻刻・校定〕

- ①『郝・英藏釋録』1 (pp.384-392)
②同1 (pp.416-419)
③同2 (pp.172-173)
③田中良昭「摩奴羅・鶴勒那付法に關する敦煌新出資料について」(『印佛研』9-1, 1961, pp.221-224)
③⑨田中良昭「『付法藏因緣傳』と『付囑法藏傳略抄』」(『田中敦煌』pp.77-80, pp.99-100)

〔著書・論文〕

- 水野清一「付法藏傳と雲岡石窟」(京都帝國大學文學部史學科編『紀元二千六百年記念史學論文集』内外出版印刷, 1941) →水野清一『中國の佛教美術』(平凡社, 1966, pp.332-335) →同(1990)
柳田聖山「燈史の系譜」(『日佛年報』19, 1953, pp.1-46) →〈柳田〉1 (pp.583-628)
田中良昭「摩奴羅・鶴勒那付法に關する敦煌新出資料について」(『印佛研』9-1, 1961, pp.221-224)
田中良昭「付法藏因緣傳と禪の傳燈—敦煌資料數種を中心として—」(『印佛研』10-1, 1962, pp.243-246)
柳田聖山「『寶林傳』の構成と西天二十八祖説」(『柳田史書』, pp.365-380) →〈柳田〉6 (pp.365-380)
田中良昭「『付法藏因緣傳』と『付囑法藏傳略抄』」(『田中敦煌』, pp.61-105)
田中良昭「『壇法儀則』の付法藏品部第三十五」(『田中敦煌』, pp.105-166)

〔略記〕

この書のもとになったのは『付法藏因緣傳』(以下『付法藏傳』) 6巻であ

り、それは『大正藏』巻50に收められ、元魏の延興2年（472）、吉迦夜・曇曜どんようの共譯になるものとされている。しかし『付法藏傳』の中國僞撰説もかなり一般化しており、『佛法東流傳』等と同じく、佛法相承を強調する僞史の一種であるという説が有力である。その内容は、釋尊の入滅後、インドにおいて佛法を相承する24祖の付法をめぐる因縁を記したもので、最後に第24祖の師子比丘が彌多羅掘王の破佛によって殺戮され、法の傳承が斷絶したことを述べて終っている。

隋唐時代、中國の佛教諸宗は、自派の教法の正統性を主張するために釋尊にその淵源を求めたが、その要請に最も適切に應えたのが『付法藏傳』であった。すなわち先ず天台智顛がその著『摩訶止觀』の巻首に、この『付法藏傳』の23祖（末田地を含めると24祖）の系譜を採用してより、特に傳燈を強調する禪宗の用いるところとなった。『歴代法寶記』を代表とする西天29祖説や、敦煌本『壇經』の西天東土33代説、更に後に禪宗傳燈説の定説となる『寶林傳』及びそれに後續する『聖胄集』『祖堂集』『景德傳燈録』等の西天28祖説は、すべてこの『付法藏傳』の西天祖統説をよりどころとしつつ、それにいま一つのよりどころとされる『達摩多羅禪經』を用いて加上改變を加えたものである。

ところで、本書は敦煌文獻にのみ存在するもので、『付法藏傳』のうち、師資相承に関する部分のみを抄出したものであり、現在までに上記13種の存在が知られている。すなわちそれは、譬えば⑨では、「聖者師子比丘從尊者鶴勒那夜奢付囑一代教時」という前書きに續いて、「第廿四代付法藏人聖者師子比丘」という標題があり、以下本文は、『付法藏傳』の該當部分を抄録した内容を掲げている。ただすべてに共通するのは、「佛、摩訶迦葉に付囑せし正法、展轉して我に至る。我、今涅槃に入らんとするが故に汝に付す。汝、當に守護して斷絶せしむること勿れ」という正法付囑の一文と、「受法後は正法を弘め、衆生を利益し、所作終りて捨命するに、衆人舍利を集めて起塔供養せり」という正法流布・起塔供養の一文とが必ずあり、この二文のみのものもあるほどである。田中良昭氏によれば、このテキストは後に密教で禪宗文獻を依用して作成された『壇法儀則』の「付法藏品部第三十五」において、それを構成する6種のうちの第3に、『佛初興世時（記）』、『付囑法藏傳略抄』、『法住記（略抄）』の3種を連寫する中に用いられていることが明らかにされている。

また、P2791は『付囑法藏傳略抄』そのものではないが、『付法藏傳』の一部と見られる師資相承の内容を取り入れつつも、他にその例を見ない23世の傳法系譜を主張している。すなわち、第1から第6までは佛十大弟子中の6人、第7から第11までは『付法藏傳』の第19から第23祖までの5人、第12から第17までは禪宗の東土6祖の6人、第18から第23まではインド・中國の代表的佛教者6人というように一貫していない。こうした須菩提より慧遠に至る23世という系譜は、禪宗の主張が色濃く反映されながら、あくまでも『付法藏傳』の23祖という數字にこだわっているようにもみえることから、極めて奇異なものといえよう。

この外、⑤にも『佛初興世時記』、『付囑(法)藏傳略抄』、『法住記』などのタイトルのみが見られるが、『付囑法藏傳略抄』の本文は存在しない。

6. 菩提達摩南宗定是非論 (頓悟最上乘論)

①S7907 ②P2045 ③P3047 ④P3488 ⑤敦煌市博物館所藏077 (任子宜舊藏本)

[テキストの翻刻・校定]

②③胡適『神會和尚遺集』卷2、卷3 (上海, 亞東圖書館, 1930, pp.159-191) → 『胡適校 敦煌唐寫本 神會和尚遺集』(臺北, 胡適紀念館, 1968, pp.159-191)

②③④胡適「新校定的敦煌寫本神會和尚遺著兩種」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』29, 臺北, 1958, pp.838-857) → 『胡適校 敦煌唐寫本 神會和尚遺集』(臺北, 胡適紀念館, 1968, pp.258-319)

②③④⑤楊曾文「菩提達摩南宗定是非論 唐 獨孤沛撰」(『神會和尚禪話錄』〈中國佛教典籍選刊〉北京, 中華書局, 1996, pp.15-48)

①②③④⑤鄧文寬、榮新江録校『敦博本禪籍録校』〈敦煌文獻分類録校叢刊〉(南京, 江蘇古籍出版社, 1998, pp.1-106)

[著書・論文]

宇井伯壽「荷澤宗の盛衰」(『禪宗史研究』岩波書店, 1935, pp.195-263) → 同『禪宗史研究』〈印度哲學研究 九〉(岩波書店, 1982, pp.195-263)

柳田聖山「燈史の系譜」(『日佛年報』19, 1953, pp.1-46) → 〈柳田〉1

(pp.583-628)

胡適校寫『菩提達摩南宗定是非論』後記(「新校定的敦煌寫本神會和尚遺著兩種」『中央研究院歷史語言研究所集刊』29,臺北,1958,pp.862-873)

關口眞大「神會の南宗獨立」(『禪宗思想史』山喜房佛書林,1964,pp.153-166)

柳田聖山「『菩提達摩南宗定是非論』について」(『柳田史書』pp.103-117) → 〈柳田〉6 (pp.103-117)

篠原壽雄「荷澤神會のことば 第二—譯注『菩提達摩南宗定是非論』」(『文化』1,1974,pp.101-170,『文化』2,1976,pp.79-124)

田中良昭「北宗禪と南宗禪—神會の北宗批判」(『佛教思想史』4,〈佛教内部における對論 中國・チベット〉平樂寺書店,1982.12,pp.85-113) → 『田中敦煌』(pp.479-500)

竹内弘道「『南宗定是非論』の成立について」(『印佛研』29-2,1981,pp.124-125)

田中良昭「菩提達摩南宗定是非論」(『敦煌Ⅱ』pp.203-250,418-431)

徳重寛道「『神會語録』の成立に關する一考察」(『印度哲學佛教學』10,1995,pp.220-235)

『方・英藏目録』(pp.250-251)

高堂晃壽「『菩提達摩南宗定是非論』の諸問題—その増廣の意味するもの」(『江島惠教博士追悼論集：空と實在』春秋社,2001,pp.575-591)

高堂晃壽「『菩提達摩南宗定是非論』金剛經宣揚部の意味するもの」(『木村清孝博士還曆記念論集：東アジア佛教—その成立と展開』春秋社,2002,pp.131-146)

陳盛港「再論獨孤沛之『菩提達摩南宗定是非論』」(『佛學研究中心學報』7,臺北,2002,pp.115-146)

〔略記〕

『菩提達摩南宗定是非論』(以下、『定是非論』)は、神會が北宗排撃をした法論の記録として、南北兩宗分派の事情を知る貴重な資料とされるものである。胡適氏が禪宗史研究で最も力をいれたのがこの神會であって、神會こそ初期禪宗史の大きな鍵を握る存在ということができよう。

民國15年(1926)、パリの國立圖書館で③と④の2種を發見された胡適氏

は、民國19年(1930)、他の神會の著作とあわせて『神會和尚遺集』4巻として公刊された。すなわち、③の『定是非論』の前半に相當する部分を上巻とし、④を下巻として、それぞれ『神會和尚遺集』の巻2、巻3に収めたのである。後に1952年に至って②が発見されたが、その発見の経緯については、柳田氏の『柳田史書』p.114の注④に詳しい。すなわちそれによると、1952年に、リーベンタール氏がジャック・ジェルネ氏の指摘によって、②に含まれる『南陽和上頓教解脱禪門直了性壇語』(以下『壇語』)を鈴木大拙氏の『少室逸書』中の北京本寒91と校合し、英譯された(Walter.Liebenthal, 'The Sermon of Shen-hui' (ASIA MAJOR New series III-2) London, 1952, pp.132-155) のが機縁となって、鈴木、デマチーノ兩氏が②及びその他をバリの國立圖書館で調査して寫眞にされ、それを提供された胡適氏があらためて調査した結果、②には『壇語』の他に『定是非論』の後半のあることを発見された。かくして③④と②とを校合した胡適氏は、『定是非論』の全貌を知るに至り、他の神會に關する新研究を加えて、「新校定的敦煌寫本神會和尚遺著兩種」として發表されたのである。

本書は、首題尾題共に「菩提達摩南宗定是非論一卷」というように、元來1巻のものであって、これを上巻下巻の2巻とするのは、胡適氏が寫本の上から③を上巻、④を下巻(②は下巻の一部)と便宜的に分けたにすぎないものである。

本書の本文は、神會と崇遠法師との問答形式によって展開され、天下の學道者のために宗旨を定め、是非を辨ずる主題と、般若波羅蜜を讚歎稱揚する部分とからなり、本文の前後には撰者である獨孤沛の造論の緣由を述べた序及び後序と讚文とがつけ加えられている。

本書に記された法論は、開元20年(732)正月15日に行われた滑臺大雲寺における無遮大會の際になされたものであることが、胡適氏によって論證されている。

なお、最初に⑤を紹介されたのは、向達氏である。すなわち氏の「西征小記一瓜沙談往之一」(『國學季刊』VII-1, 1950, pp.1-24) 一後に同氏の『唐代長安與西域文明』(北京, 生活・讀書・新知三聯書店, 1957, pp.337-372) に収録。→同〈二十世紀中國史學名著〉河北教育出版社, 2001, pp.328-364) において記載した⑤に關する記述内容によるものである。それによれば、敦煌の任子宜氏所藏本の中に、梵夾式蝶裝本1冊、凡そ93葉があり、その中に首部1

葉12行を缺く『菩提達摩南宗定是非論』、『南陽和上頓教解脫禪門直了性壇語』、『南宗頓教最上乘壇經』、神秀の門人である淨覺の『注金剛般若波羅蜜多心經』の都合4種が収められ、この「淨覺心經注」には光範の跋があり、五代、或いは宋初の傳抄本で、每半葉6行の宋藏の格式をもつという。ところが、所藏者の任氏が亡くなった後、長い間⑤の所在は不明のままであったが、1986年、楊曾文氏が周紹良氏から寫眞提供を受け、⑤が敦煌縣（現市）博物館に收藏されていることを突き止めたのである。楊氏によれば、再び出現した⑤によって、従來の胡適校本ではわからなかった計450字にもものぼる不明箇所がすべて明らかになったという。そこで②③④⑤の4種のテキストを用いて新たに『定是非論』のテキストを校合したものが、楊氏の「菩提達摩南宗定是非論 唐獨孤沔撰」である。

また①については、『定是非論』の首部の内容をもつ約15行の斷片で、『英藏敦煌』12 (p.69) の影印や『方・英藏目録』によって知られ、鄧文寬、榮新江録校『敦博本禪籍録校』においては、『定是非論』の一校本として用いられた。

高堂晃壽氏の「『菩提達摩南宗定是非論』の諸問題—その増廣の意味するもの」では、『定是非論』は複雑な増廣過程を経て今日の姿に至り、その本文にある金剛經宣揚部が後に付加されたものであるとし、さらに、神會の法系説の主眼は、達摩を初祖、慧能を六祖として兩者のイメージを重複させることで、自らの主張する「菩提達摩南宗」に、西天直傳でありかつ北宗に對抗すべき南地の禪の正統という印象を付與することにあつたとしている。

さらに同氏の「『菩提達摩南宗定是非論』金剛經宣揚部の意味するもの」では、『定是非論』金剛經宣揚部は、石井本『南陽和尚問答雜徴義』に採録された話頭を素材として作成されたものであり、その基本構造が、般若波羅蜜の實踐と、神會の思想の根幹たる「無念」とを「一行三昧」の名のもとに統合したものであるとした上で、金剛經受持の宣揚が、心の本源的清淨の發現による「頓悟」をその根底に置く神會思想に缺落する實踐への指標を提示すべく、新たに導入されたものであると指摘している。

陳盛港氏の「再論獨孤沔之『菩提達摩南宗定是非論』」では、北宗の代辯者の役割を演じた崇遠法師に關する記述をはじめ、従來の研究においては輕視されがちな内容に焦點をあて、神會の姓氏、滑臺における無遮大會の開催時間、場所、規模などを検討することによって、神會の發動した北宗排擊運

動の合理性を吟味したのである。

ただ徳重寛道氏の『神會語録』の成立に関する一考察^①では、『定是非論』を中心とした『神會語録』に関する敦煌禪宗文獻が、神會の生前没後にわたって段階的に増廣や改編を受け續け、しかも各々の文獻が相互に關連しながら重層的に成立したものであると述べ、『金剛經』の重視等を神會の思想の特質ととらえる現在の研究傾向に對して、それを誠めている。

7. 楞伽師資記 (楞伽師資血脈記) → 『歴代法寶記』による

- ①S2054 ②S4272 ③P3294 ④P3436 ⑤P3537 ⑥P3703 ⑦P4564
 ⑧D x 1728 (M2686) ⑨D x 5464 + D x 5466
 ⑩D x 8300 + D x 18947 ⑪スタイン蒐集チベット文獻プサン目録704
 ⑫スタイン蒐集チベット文獻プサン目録710 (2)

[テキストの翻刻・校定]

- ①矢吹慶輝『鳴沙餘韻圖版』75, 76 (1)
 ①②④金九經『校刊唐寫本楞伽師資記』(京城, 1931) — ①金1
 ①金1『大正藏』卷85古逸部 (1932, pp.1283a-1290c) — ①
 ①②④金1金九經『薑園叢書』(奉天, 1935) — ①金2
 ①宇井伯壽「北宗殘簡」(『禪宗史研究』岩波書店, 1935, pp.432-43, 第七神秀・玄曠・慧安章, 第八普寂・敬賢・義福・惠福章, pp.439-440第六弘忍章, pp.442-444序) → (同, 1966)
 ①②④金2鈴木大拙「楞伽師資記道信傳本文」(『禪思想史研究』第2, 岩波書店, 1951, pp.268-277)「弘忍傳本文」(同, pp.296-298) → 『鈴木大拙全集』卷2 (1968)
 ①②④金2篠原壽雄「楞伽師資記校注」(『内野台嶺先生追悼論文集』大藏省印刷局, 1954, pp.132-164)
 ③⑤田中良昭「敦煌新出ペリオ本楞伽師資記二種について—特に淨覺序の首缺を補う—」(『宗學研究』4, 1962, p.70) → 『田中敦煌』(pp.27-29)
 ①③⑦柳田聖山「楞伽師資記序」(『柳田史書』, pp.625-637) → 〈柳田〉
 6
 ①②③④⑤⑥⑦柳田聖山『初期の禪史 I』〈禪の語録〉2 (筑摩書房, 1971, pp.47-326)

⑫沖本克己「『楞伽師資記』の研究—藏漢テキストの校訂および藏文和譯(1), (2)」(『花大研究紀要』9, 1978, pp.058-087, 『禪文研紀要』11, 1979, pp.01-028)

⑬2「一、楞伽師資記(並原序)」(石峻等編『中國佛教思想資料選編』第2卷4冊, 北京, 中華書局, 1983, pp.150-171)

⑭榮新江「敦煌本禪宗燈史殘卷拾遺」(『周紹良先生欣開九帙慶壽文集』北京, 中華書局, 1997, pp.231-244) → 衣川賢次和譯「ロシア所藏の景德傳燈録」(『禪文化』161, 1996, pp.134-146)(第2章のみ)

⑮⑯程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」(『禪學研究』83, 2005, pp.17-45)

⑰⑱⑲中西久味「『俄藏敦煌文獻』禪籍資料初探」(『比較宗教思想研究』5, 2005, pp.61-78)

〔著書・論文〕

鈴木大拙「楞伽師資記とその内容概観」(『大谷學報』12-3, 1931, pp.1-33) → 『正法輪』759-771, 1933 → 『禪の諸問題』(大東出版社, 1941, pp.234-269) → 『鈴木大拙全集』卷18(岩波書店, 1969, pp.187-214)

矢吹慶輝「敦煌出土本楞伽師資記について」(『宗教學年報』1, 1933, pp.4-15)

矢吹慶輝「敦煌出土支那古禪史並に古禪籍關係文獻に就いて」(『鳴沙餘韻解説』第二部, pp.482-502)

胡適「『楞伽師資記』序」(『海潮音』13-4, 1932) → 胡適『論學近著』1-2, 上海商務印書館, 1935) → 『胡適文集』5(北京, 北京大學出版社, 1998, pp.192-198)

宇井伯壽「北宗殘簡—楞伽師資記」(『禪宗史研究』岩波書店, 1935, pp.420-421) → (同, 1966)

鈴木大拙「楞伽師資記」(『禪思想史研究』第2', 岩波書店, 1951, pp.266-268) → 『鈴木大拙全集』卷2(1968)

篠原壽雄「楞伽師資記について」(『駒澤大學研究紀要』13, 1955, pp.93-106)

田中良昭「楞伽師資記と禪の傳燈—淨覺に關する諸問題」(『駒澤大學佛教學會誌』2, 1959, pp.1-12)

中川孝「楞伽師資記の成立について—著者の時代的考察とその思想的背景—」(『東北薬科大学紀要』7, 1960, pp.145-155)

中川孝「禪宗史研究資料としての楞伽師資記の内容」(『印佛研』9-1, 1961, pp.142-143)

田中良昭「敦煌新出ペリオ本楞伽師資記二種について—特に浄覺序の首缺を補う」(『宗學研究』4, 1962, pp.69-74) → 『田中敦煌』(pp.27-37)

柳田聖山「『楞伽師資記』の形成その一、その二」、「『楞伽師資記』の作者」(『柳田史書』pp.58-100) → 〈柳田〉6

上山大峻「チベット譯『楞伽師資記』について」(『佛教學研究』25・26合併號, 1968, pp.191-209)

柳田聖山「禪思想の形成—『傳法寶記』と『楞伽師資記』—」(『花大研究紀要』1, 1970, pp.257-308)

柳田聖山『初期の禪史I』〈禪の語録〉2 (筑摩書房, 1971, pp.3-45)

上山大峻「チベット譯からみた『楞伽師資記』成立の問題點」(『印佛研』21-2, 1973.3, pp.90-95)

沖本克己「『楞伽師資記』の研究—藏漢テキストの校訂および藏文和譯(1), (2)」(『花大研究紀要』9, 1978, pp.058-087, 『禪文研紀要』11, 1979, pp.01-028)

西岡祖秀「チベット譯『楞伽師資記』の新出斷片について」(『印佛研』31-1, 1982, pp.387-390)

藤田正浩「『楞伽師資記』における道信の自性清淨心・如來藏思想」(『印佛研』32-1, 1983, pp.268-271)

David W. Chappell: "The Teachings of the Fourth Ch'an Patriarch Tao-hsin (580-651)" *Early Ch'an in China and Tibet* 《BERKELEY BUDDHIST STUDIES》5, co-edited by Whalen Lai and Lewis R. Lancaster, Asian Humanities Press, Berkeley, California, 1983, pp.89-106) → 田中良昭和譯「禪宗第四祖道信(580-651)の教え(一)(二)」(『駒大宗教論集』13, 1987, pp.375-386, 同14, 1988, pp.223-236) (序説のみ)

Jonathan Christopher Cleary: "Records of the Teachers and Students of the Lanka" (*Zen dawn—Early Zen texts from Tun huang—* Boston. Shambhala, 1986, pp.17-78) (英譯)

伊吹敦「最澄の傳えた初期禪宗文獻について」(『禪文研紀要』23, 1997,

pp.127-201)

楊曾文「淨覺和『楞伽師資記』」（『唐五代禪宗史』北京、中國社會科學出版社、1999、pp.132-140）

程正「淨覺—その人と思想」（『駒大禪研年報』13・14合併號、2002、pp.45-62）

千田たくま「『楞伽師資記』の作者淨覺について」（『竹貫元勝博士還暦記念論文集：禪とその周邊學の研究』永田文昌堂、2005、pp.205-215）

千田たくま「『楞伽師資記』の撰述年代」（『印佛研』56-1、2007、pp.163-168）

〔略記〕

『楞伽師資記』は、弘忍—玄曠—淨覺と次第する北宗系の淨覺が、師の玄曠の著『楞伽人法志』に基いて開元元年～4年（713-716）頃に編纂したものとされる極めて重要な初期禪宗の燈史である。淨覺には、別に同じく敦煌から発見された『注般若波羅蜜多心經』があり、その李知非の序によって、別に『金剛般若理鏡』一卷の著作があったとされるが、これは現存しない。本書の特色は、禪宗初祖とされる菩提達摩を第2とし、それに先立つ第1として『四卷楞伽』の譯者求那跋陀羅を將ち來ったところにある。また第2の菩提達摩章には、弟子曇林的序した『略辨大乘入道四行』が依用されて特色ある達摩の禪法を伝え、第4の僧璨章には、仙城慧命のものとされる『詳玄賦』の傳注が、『詳玄傳』と題して掲げられている。第5の道信章は、本書全體の約五分の二のスペースをさいて道信の禪法を伝えるが、それは道信の著作とされる『入道安心要方便法門』そのものであるという説が有力である。道信を承けた弘忍の東山法門は、會下に多くの秀れた龍象を打出して、禪が中國各地に擴大する基盤をなした。本書はその内の神秀を第7とするが、弘忍、神秀の兩章は、『楞伽人法志』に基づくもので、この書全體が玄曠の強い影響のもとに成ったことが窺われる。

本書はすべて敦煌文獻で、漢文10種（但し、この内2種は結合による）と漢文からのチベット譯2種の存在が知られている。本書が古くから關心のもたれた文獻であることは、〔テキストの繙刻・校定〕に示した通りで、矢吹慶輝、金九經、宇井伯壽、鈴木大拙等の諸氏による紹介、校定がなされており、その後、篠原壽雄、柳田聖山氏らによって校注乃至は完本復元への努

力がなされてきた。

先ず①②④は、胡適氏が民國15年（1926）に発見され、鈴木大拙氏の依頼で金九經氏が校訂し、金氏再度の校訂によって『薑園叢書』に収められ、後述する柳田氏の校訂本以前には、これが主として依用された。篠原氏の校注も、前記3本と②との校合である。その後、柳田氏は新たに発見された③⑤⑥⑦を加え、ほぼ完全な校訂をされ、今日に及んでいる。

③⑤は田中良昭氏が王重民氏の撮影したペリオ本の寫眞の中に見出したもので、③によって序の部分に約200字補ったが、まだ首部の完全な復元には至らなかった。⑤は②の前部に當るものである。⑥⑦はいずれも柳田氏の紹介になるものであり、これらのすべてを用いて校訂されたのが、前述の柳田氏の校訂本である。柳田氏によれば、それでも⑦と③の間にはなお數行の缺があるということであるが、近年ロシア藏の敦煌文獻中、榮新江氏が発見された⑧によって、そのうち「(前缺) 去有因。今逢正法」の7字が新たに復元できたものの、なお完全なテキストは得られていない。

一方、ロンドンにあるインディア・オフィス・ライブラリー所藏のスタン収集チベット文獻の中に、本書のチベット譯、すなわち⑫のあることが上山大峻氏によって発見され、さらに西岡祖秀氏によって⑪も発見されて注目を集めた。上山氏によれば、寫本としては完結であるが、その内容は序文がなく、本文標題（直譯は「リンカの師と弟子との經」という）より始まり、漢文本の第五祖道信章の途中「…識無形、佛無形、佛無相貌」(T.85.1287a)までで終っているという。敦煌の吐蕃支配によって中國とチベットとの交流が密接となり、禪宗文獻の中にも、兩者の交流を示すものとして、宮本正尊氏の紹介された漢藏對音『大乘中宗見解』、ポール・ドミエヴィル氏紹介の『頓悟大乘正理決』、上山氏の研究になる曇曠の『大乘廿二問』等がクローズアップされた。ドミエヴィル氏の「ラサの宗論」と、それに對するジュゼッペ・トゥッチ氏の「サムイエの宗論」をはじめとして、山口瑞鳳、上山大峻、小島宏允、沖本克己等の諸氏を代表とする日本のチベット學者によって、この方面の研究に大きな成果がもたらされたのである。

なお、『楞伽師資記』の資料、及び研究の經過については、『柳田史書』の附録「資料の校注」の資料八『楞伽師資記序』に付せられた解題や、同氏の『初期の禪史Ⅰ』の解説部分などに詳しい。

最近の研究成果としては、千田たくま氏の『『楞伽師資記』の撰述年代』

がある。千田氏は本書にある「則天大聖皇后、應天神龍皇帝、太上皇」という記述を根據に、本書の成立年代を713—716年の間に推定された柳田氏の説に對して、この記述は本書の内容にリアリティーを出すために使用されているもので、成立年代を推定する根據としては弱いと指摘された。さらに、神會の北宗批判の記録である『定是非論』においては、同じく北宗の燈史である『傳法寶紀』を厳しく批判したにもかかわらず、南宗燈史と異なる祖統説を展開した本書への言及は皆無であることなどから、本書の成立年代を、神會が北宗批判を開始する開元18年(730)以後と想定され、新たな問題提起をされている。

また、本書の著者である淨覺については、かつて柳田聖山氏の研究によって唐の中宗皇帝の皇后であった韋氏の實弟とされていたが、程正氏の「淨覺—その人と思想」と題する論文では、『旧唐書』などのいわゆる中國の正史の書を用いて、淨覺と同時代の韋氏一族を中心に考察し、淨覺が韋皇后の實弟ではないことを明らかにし、さらに同じく淨覺の著した『般若心經注』を基本資料にして、『楞伽師資記』、『四卷楞伽』、『大般涅槃經』などの資料を援用しつつ、淨覺に見られる「一乘道」の思想と淨覺の佛性觀の二つのテーマに絞って、その思想的關連性を解明することに努めたのである。それに対して、千田たくま氏の『『楞伽師資記』の作者淨覺について』では、淨覺撰『楞伽師資記』、『注般若波羅蜜多心經』、王維撰『大唐大安國寺故大德淨覺師並序』などの從來知られている資料を改めて検討した上で、新たに『大慈禪師墓誌銘並序』を紹介し、この大慈禪師を本書の著者の淨覺と同一人物であるととした。

8. 歷代法寶記(師資血脈傳、定是非摧邪顯正破壞一切心傳、最上乘頓悟法門)

- ①S516 ②S1611 ③S1776V ④S5916 ⑤S11014 ⑥P2125
 ⑦P3717 ⑧P3727V ⑨Φ261 ⑩石井光雄氏舊藏本 ⑪津藝103V
 ⑫津藝304V ⑬Ch3934rV

[テキストの翻刻・校定]

- ①⑥『大正藏』卷51史傳部3(1928, pp.179a-192a)
 ①矢吹慶輝『鳴沙餘韻圖版』76(Ⅱ)
 ①⑥金九經『葦園叢書』(奉天, 1935)

①②③④⑥⑦⑧柳田聖山『初期の禪史Ⅱ』〈禪の語録〉3 (筑摩書房, 1976, pp.37-324)

⑤⑨榮新江「敦煌本禪宗燈史殘卷拾遺」(『周紹良先生欣開九帙慶壽文集』北京, 中華書局, 1997, pp.231-244)

⑬西脇常記「禪籍について」(『ドイツ將來のトルファン漢語文書』京都大學學術出版會, 2002, pp.138-140)

⑩榮新江「有關敦煌本『歷代法寶記』的新資料—積翠軒文庫舊藏「略出本校録」(『戒幢佛學』2, 長沙, 岳麓書社, 2002, pp.94-105)

①②③④⑥⑦⑧「斯五一六 歷代法寶記」(『郝・英藏釋録』2, pp.467-564)

〔著書・論文〕

矢吹慶輝「敦煌出土支那古禪史並に古禪籍關係文獻について」(『鳴沙餘韻解説』第二部, pp.504-520)

柳田聖山「燈史の系譜」(『日佛年報』19, 1953, pp.1-46) → 〈柳田〉1 (pp.583-628)

柳田聖山「『歷代法寶記』の登場」「『歷代法寶記』の構成その一, その二, その三」(『柳田史書』pp.278-334) → 〈柳田〉6 (pp.278-334)

金原東英「『歷代法寶記』の戒律について」(『駒大大學院年報』4, 1970, pp.55-58)

山口瑞鳳「チベット佛教と新羅の金和尚」(金知見, 蔡印幻編『新羅佛教研究』山喜房佛書林, 1973, pp.1-36)

近藤良一「『歷代法寶記』の諸寫本について」(『印佛研』21-2, 1973, pp.313-318)

小島宏允「チベットの禪宗と『歷代法寶記』」(『禪文研紀要』6, 1974, pp.139-176)

小島宏允「チベット傳ボダイダルマタラ禪師考」(『印佛研』24-1, 1975, pp.229-232)

小島宏允「『歷代法寶記』と古代チベットの佛教」(柳田聖山『初期の禪史Ⅱ』〈禪の語録〉3, 筑摩書房, 1976, pp.325-337)

柳田聖山『初期の禪史Ⅱ』〈禪の語録〉3 (筑摩書房, 1976, pp.1-35)

沖本克己「敦煌出土西藏文禪宗文獻の研究」(『印佛研』28-1, 1979,

pp.082-086)

渡部正英 『『傳法寶紀』と『歴代法寶記』について』 (『宗學研究』 22, 1980, pp.212-216)

渡部正英 『『歴代法寶記』についての一考察』 (『宗學研究』 23, 1981, pp.215-220)

柳田聖山 『『大正新脩大藏經』と「歴代法寶記」およびその周邊の問題』 (『古田紹欽博士古稀記念論集』 佛教の歴史的展開に見る諸形態』 創文社, 1981, pp.371-387)

Yanagida Seizan, tr. by Carl Bielfeldt 'The *Li-tai fao-pao chi* and the Ch'an Doctrine of Sudden Awakening', "*Early Ch'an in China and Tibet*", Asian Humanities Press, Berkeley, California, 1983, pp.13-49.

小川隆 「敦煌本「六祖壇經」と「歴代法寶記」」 (『宗學研究』 28, 1986, pp.175-178)

尾崎正善 「熊耳山と達磨の關係について—「歴代法寶記」の祖統説」 (『宗學研究』 32, 1990, pp.241-244)

石井修道 『『歴代法寶記』の頓悟思想』 (『宗教研究』 67-4, 1994, pp.253-254)

沖本克己 『『七祖法寶記』について』 (『禪學研究』 75, 1997, pp.16-63) → 同氏 『禪思想形成史の研究』 (花園大學國際禪研究所研究報告) 5 (1998, pp.232-277)

千田たくま 『『歴代法寶記』についての二、三の問題—特にその標題と成立地について—』 (『印度哲學佛教學』 18, 2003, pp.155-166)

程正 『『七祖法寶記』に關する一考察—特にその成立について—』 (『駒大大學院年報』 37, 2004, pp.17-31)

程正 「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」 (『禪學研究』 83, 2005, pp.17-45)

中西久味 『『俄藏敦煌文獻』禪籍資料初探』 (『比較宗教思想研究』 5, 2005, pp.61-78)

程正 「二十九祖説考 (二)」 (『禪學研究』 84, 2006, pp.39-67)

王書慶, 楊富學 『『歴代法寶記』所見達摩祖衣傳承考辨』 (『敦煌學輯刊』 53, 2006, pp.158-164)

〔略記〕

『歴代法寶記』は、達摩の傳衣が六祖慧能のところにありと主張する神會の『菩提達摩南宗定是非論』を利用し、求那跋陀羅を初祖とする北宗系の『楞伽師資記』の傳燈説を批判しつつ、達摩の傳衣が則天武后によって召し上げられ、それが東山弘忍の十大弟子の一人である劍南の智詵に授けられたとすることによって、智詵を達摩の正系に仕立て上げ、その後、さらに智詵—処寂—無相—無住の四世にわたって傳衣が相承されたことを主張し、併せて淨衆無相、保唐無住の禪法・思想を述べようとした燈史の一種である。北宗系の『楞伽師資記』『傳法寶紀』に對して、『菩提達摩南宗定是非論』と共に、六祖慧能を正系とする南宗系燈史の一角を形成する重要な資料である。この書の成立年代と著者については、明確な記載はないが、本書全體の約三分の二が無住の傳で占められており、しかも無住の示寂を大曆9年（774）6月3日と明記していることから、無住の示寂後間もない頃に、無住の門人が編纂したものとされている。

特に注目されるのは西天29祖説の主張であり、これは末田地を含む『付法藏因縁傳』の24祖に、『達摩多羅禪經』の本文序の西天8祖の内、重複する迦葉—阿難—末田地を除く5祖を加上したものである。特に第29祖の菩提達摩多羅は、本來別人である菩提達摩と達摩多羅という二人の人物を、達摩を共通項として結合し、新たに創作したものであり、これによって両者が別人であるという矛盾を解消しようとしたのである。

また本書は、かつて柳田聖山氏により、『諸經要抄』の擬題を持つ大谷大學圖書館所藏の敦煌文獻との類似性が指摘されていた。さらに近年、中國で新たに敦煌文獻の『七祖法寶記』の存在が知られるにいたり、それに基づいて、沖本克己氏が「『七祖法寶記』について」と題する論文において、『諸經要抄』が實はこの『七祖法寶記』の異本であることを突き止め、ここにいう「七祖」とは神會でなければならないとした。この沖本氏の研究成果を踏まえて、『歴代法寶記』は神會派の『七祖法寶記』の影響を受けつつも、非北宗、非南宗（荷澤宗）の第三者である淨衆・保唐宗の立場を明らかにしようとして撰述されたものと主張したのが、程正氏の「『七祖法寶記』に關する一考察—特にその成立について—」と題する論文である。

一方、千田たくま氏は「『歴代法寶記』についての二、三の問題—特にその標題と成立地について—」と題する論文において、本書の標題に着目し、

それが『歴代法寶記』ではなく『歷代法寶記』であることから、本書を唐の大暦年間（766-779）の傳法の記録であるとした上で、従来四川省成都にあったとされてきた保唐寺も、實は成都にあったことを裏付ける資料は皆無で、むしろ長安にあったことを示す資料が存在すると指摘し、本書の成立地についても新たな問題を投げかけた。

本書の巻頭には、自らが據った37種の資料名を列挙しており、本書がいかに多くの資料を駆使して編纂したものであるかを示している。

また、敦煌文書にしか存しない本書のテキストについては、当初①⑥のみが知られるに過ぎなかったが、その後発見された②は僧瑒章であり、③は弘忍、慧能章であり、④は内容は『漢法本内傳』であるが、實は本書巻頭部分の依用であることが判明している。また⑦は冒頭の残缺數行を除いてはほぼ完全なものであり、⑧は達摩章の首部のみである。

ところで、新たに俄（ロシア）藏敦煌文獻から発見された⑨は、『大正藏』卷51の180頁a段の1行目から181頁a段の19行目までのものであり、西天29祖や達摩章のすべてを含む59行にわたる斷簡である。

一方、ドイツ所藏の⑩は、『大正藏』卷51の190頁b段の9行目から13行目にあたり、無住の説法の一部でわずか3行の斷簡である。さらに天津藝術博物館所藏の⑪は、『大正藏』卷51の181頁a段の8行目から181頁b段の7行目までのもので、達摩章の末尾から慧可章の前半部分までの18行の朱で書かれた斷簡である。一方、同博物館所藏の⑫は、『大正藏』卷51の179頁a段の14行目あたりから194頁c段の28行目までの、朱で書寫した部分と墨で書寫した部分が混在した長卷子であるが、冒頭部分にわずか數行と思われる缺落と巻末の中途擱筆が惜しまれる。

また、長い間その行方が不明とされていた石井光雄氏舊藏本（石井本）については、榮新江氏の「有關敦煌本『歴代法寶記』的新資料—積翠軒文庫舊藏「略出本」校録」と題する論文によってその全貌が明らかにされた。それによれば、石井本は首尾ともに缺くが、約285行が存在し、しかも他のテキストとの比較の結果、本書の略出本であることが明らかにされている。